



おやじん
Vol.01
2016 08

YAazine

親爺が作る、親爺のための、適当で、いい加減な雑誌



親爺純情物語



あなたと同じ、
ちよつと頑固な
スピーカー。

アルミニウムボディと本革製のハンドルの
ポータブルステレオ
スピーカー
EZ02
価格 9,720円 (税込)

BIRD
ELECTRON

このスピーカーは最近流行のBluetoothスピーカーのようなワイヤレスでも重低音が出るわけでもありません。しかし、接続するデジタルオーディオプレーヤーの出力だけで鳴るシンプルな回路なのでクリアな音が自慢です。そして何よりもボディ本体には一切プラスチックを使わずに、アルミと鉄で仕上げた堅牢な質感と無駄を廃したシンプルなデザインも特徴です。ポータブルですがちよつと重い、しかし時代に流されないあなたと同じ、頑固なスピーカーです。詳しくはバード電子オンラインショップをご覧ください。
<http://shop.bird-electron.co.jp/> tel.044-854-0198

ONLINE SHOP
SABism
<http://www.sabism.com/>

●たっぷり錆びたiPhone6用ケース (全12種類)
ケース本体はプラスチック製。錆はすべて印刷です。
2,592円(税込・送料無料)~



ココロまでも
錆びちやいなない。



プロフィール写真・宣材写真、
アー写から遺影まで。
今の旬なあなたを
人生をたっぷり生きた親爺が
粋に撮ります。
お気軽にご相談ください。

SABism
Portrait
Studio

島製作所
tel.03-6441-2604
mail: info@sabism.com

編集後記

前回の00号はおかげさまで好評でした。今号は執筆者が二人増え、ページ数も20ページになりました。また今回から紅一点親爺ならぬおばさんが一名参加することになりました。おばさんというにはまだまだ若い女性ですが、OYazineメンバーがあれは男女は問いませぬ。

この雑誌は親爺が作る、親爺のための雑誌です。時々親爺の定義って何ですか？と聞かれることがあります。本誌の執筆者は40代以上とされていますが、誰でもいいというわけではありません。人生のピークを過ぎて後半にさしかかり、死がちよつとリアルに感じられるようになっても尚「生きて在る」(生きてゐる)で決まれない人達だと思っています。実はこの「生きて在る」という言葉は中学の時の国語の先生が言った言葉ですが、僕は常にこの言葉と共に生きてきたような気がします。人生に余生なんか無い。死ぬまで生きる。これがOYazineらしい生き方、スピリッツだと思っています。ちよつとかっこいいことを言ってみましたが、実は00号でやめれば洒落で済むと思っていました。あまり反応が無ければ1号でやめてしまえばいい。しかし今回01号と銘打ったからには走り続けるしかありません。年4回を目標に発行したいと思えます。と書いて同時に自分に言い聞かせているわけですが。(島)

企画・編集・デザイン：島製作所 発行：島隆志 記事中のクレジットがない写真：島隆志
有限会社 島製作所 〒106-0032 東京都港区六本木 3-4-35 落合三幸ビル 2F TEL.03-6441-2604
<http://www.shima-f.com> ご意見・ご感想は ● mail:oyazine@shima-f.com

俺のブルース



下北沢 音倉でライブ

表紙の笑顔がかわいい親爺も藤島さんである。7月にライブで上京した折りに表紙用に撮影させてもらった。撮影中じつとしていない、ふざけまくる少年である。少しは格好良く撮ろうと思っていたが諦めた。

しかし、ライブとなるとそこに渋い「男」が現れる。スライド奏法独特のギターの音色とともに日本語でオリジナルのブルースを歌う。昔、彼が尊敬するミシシッピーに住むブルーズ「ミュージシャンに会いに行った時、「なぜフジは日本人なのに日本語でブルースを歌わないのか？」と聞かれてショックを受けた。

『そうや、アメリカのブルースではなく俺のブルースを歌えばいいんや』

それから彼は自作の、俺のブルースを歌うようになる。彼は歌だけでなく画も写真もムービーも撮るのだが、それらに共通しているのは荒削りでありながらも彼独自の自由で素材で骨太な俺の表現である。

彼のブルースは男臭いのだが、決して強面の男のそれではなく、時に女々しく、時にやさしく、時に激しくそしてあったかい。歌っている藤島晃二は正直で自由である。普段は適当でいい加減な不良親爺だが、その歌は泥臭い男の哀歌である。

若い頃は世界中をバスキングして放浪していたらしい。ロンドンにいた時が一番おもしろかったと言う。ロンドンではオーブンマイクと呼ばれるミュージシャンが自由に演奏できる場所がいくつかあり、そこでは録音したい奴はミュージシャンがオーケーであれば録音も出来る。そうやって録音された藤島さんの音源を編集してロンドンの友人ポールと一緒にCDを作った。それがBBCで流され、さらにその音源は日本にいたビーター！パラカン氏の元に届けられた。彼はそれにとっても興味を惹かれて自分のFMの番組で流した。さらに藤島さんは彼の番組に呼ばれて出演することにもなる。その後ビーター氏がNHKB S特集で企画した「ピー

たち止まれば

たち止まれば コミあがる
思い出いっばい こんにちわ
泣いた泣いたのうれし泣き
ありがとう おまえさん

カーッとお日様照りつけた
ザーッと風が吹き抜けた
目がしらくわーッと熱くなり
声ふるへ 歌えません

時のハザマウロついた
まよいまくつて ベソたれて
女々しいあんだと いわれても
ウンウンうなずき ありがとう

いつものトコロサンポして
いつものお店でお茶をのみ
いつもの事をいつものように
ウンウンうなづく俺がいる

道のふちっこ すわり込み
目の前流れるその時に
訳も分からずうなづいて
ニヤケ面の俺がいる

本音云へば 遠くなり
うんうんうなづく 空しい空
約束なんぞは ありません
鏡向かって うたつてる

いつものトコロサンポして
いつものけむりを ふかしましょ
いつもの事をいつものように
ウンウンうなづく俺がいる

たち止まれば コミあがる

作詞・作曲 藤島晃二

今年発売されたアルバム「立ち止まれば」
32ページのブックレットは彼の濃厚な画や写
真のコレクションで構成されている。



世界を放浪中に描いた、書きまくった画と写真と日記がコラージュされたスクラップブックは圧巻の量。



実家を改造したカフェ・ミシシッピー。家がまるごと藤島さんの作品である。中は行ってみてのお楽しみ。料理も美味しい！

ターバラカン音楽紀行」でも紹介され、現在日本中に根強いファンがいる。
今は高知の山中にある本山町で料理が上手い奥さんと愛犬ミシケと一緒に民家を改造したカフェ(これも濃厚な藤島ワールド)を営みながら一方で画を描き、写真を撮りつつ音楽活動を続けている。(島)

●YOU TUBEで彼を検索すればいろいろ聴けますが、オススメは音楽ドキュメンタリー『通り過ぎれば風の詩』(撮影&編集…阿部敦史)
●Facebookでは藤島晃二で検索。



Only Lonely Cup Noodle

ラーメンではないのだ。ラーメンの代用品としてカップヌードルが作られたのではないことは、どうやら確かのようなところだが、カップヌードル以降、続々と登場したカップ麺は、どれもがラーメン、うどん、そばのカップ版なのだ。同じく日清の「カップヌードルカレー」「シー

ラーメンではないのだ。ラーメンの代用品としてカップヌードルが作られたのではないことは、どうやら確かのようなところだが、カップヌードル以降、続々と登場したカップ麺は、どれもがラーメン、うどん、そばのカップ版なのだ。同じく日清の「カップヌードルカレー」「シー

筆者プロフィール
昭和38年佐賀市生まれ。立教大学在学中よりフリーライターとして娯楽全般をフィールドに執筆、現在に至る。東京ハイボールのリードギター担当。著書、連載多数。

閃いたのだ。揚げた麺に透明なチキンスープ、それと、カップヌードルじゃないか。そう、日清のカップヌードル。1971年の発売当時から食べ続けているアレだ。私は、もうずっと、あのカップヌードルが大好きなのだ。小林信彦が書いた伊府麺を思いそうだと思ったのも、それがカップヌードルを思わせたからかもしれない。ずっと、カップヌードルが食べたいと思っていただけだったのではないか。

思っていただけだったのかもしれない、本当に。私はカップヌードルを食べながら、何だか満足していた。ああ、あんな煮込み麺を食うなら、こつちの方が全然旨いんじゃないか、多分。とか、結構本気で思った。そう、私はカップヌードルが大好きだったのだ。カップヌードルミュージアムの取材をした時、ふと気が付いたことがある。カップヌードルのことをラーメンだと記述した資料は無いのだ。開発者である安藤百福のことを調べても、カップヌードルはカップヌードルであって、カップラーメンではない。

注：日清食品を取材した時に、開発スタッフが話してくれたのだが、日清食品のあらゆるカップ麺は、未だに「カップヌードル」と「カップヌードルカレー」を売り上げて越えられないのだ。そう。それも、足下にも及ばないほど差をつけられているという。(納富康邦)

小林信彦のエッセイに「伊府麺」という料理が出てくる。「耳たぶのような形の麺を油で揚げて、それを澄んだ鶏ガラのスープでいただく」というような記述だったと思う。それを中華街の屋台のような店で食べている様子が旨そうで、大学生のころに読んで、これは食べないとなど思っていた。

思っていたけれど、その頃、インターネットもなく、人に聞いても知らず、中華料理屋を何軒も周り、中華街にも通ったけれど、巡りあうことがなく、いつの間にか忘れていた。忘れてはいたけれど、記憶というものはそう簡単に消えてくれるものでもなく、ふと思いついては、結局食べることは出来ず、長崎皿う

の、納得できはしない。私にとつての伊府麺は、透明なスープに浮かぶ揚げた短い麺だ。鍋焼きうどんの中華版みたいなもので良いはずはない。うちのめされた私は、その日は原稿も書かず寝て、次の日にひどい目にあつたのだが、ゼイゼイ言いながら原稿を書いている私は、つ



オンリー・ ロンリー・ カップヌードル

どんを食べるには、この麺をチキンスープに入れてたら伊府麺か?とか考えたり、結局はペビーヌスターラーメンみたいなものなのかとか考えたりしてはいたのだ。

考えたところで、食べてみないと何も分からない。そう思いついてインターネットで検索してみようと思つたのは、結構最近のこと。そして検索すると、意外にあつさりが見つかつてしまった。伊府麺を出す店というのはいくつもあつたし、中には、伊府麺で有名な店というのもあった。

あつただけで、それはどれも、揚げた麺を澄んだスープに入れた、というふうなものではなかつたのだ。どうやら世間でいう伊府麺は、揚げた麺を煮込む料理のことらしい。そして伊府麺で有名な店は、麺料理の麺を伊府麺にすることが出来る店だった。そう、どうやら伊府麺というのは麺料理の名前ではなく、麺の種類だつたようだ。

種類だつたんだ、と思つたところで、そんなもの、納得できはしない。私にとつての伊府麺は、透明なスープに浮かぶ揚げた短い麺だ。鍋焼きうどんの中華版みたいなもので良いはずはない。うちのめされた私は、その日は原稿も書かず寝て、次の日にひどい目にあつたのだが、ゼイゼイ言いながら原稿を書いている私は、つ

JUMP 夜が落ちてくるその前に JUMP もう一度高くJUMPするよ

去年の今頃、仕事でバキスタンに向かう機上に備え付けであった週刊朝日に「私の清志郎」という記事を読みつけた。標題を見ただけで、記事を読むより先にPod classicを取り出して清志郎の音を聴き始めてしまった。

私のPod classicには三つの清志郎の音源が入っている。一つ目はNHK FMのサウンドストリートという番組の1980年最初の火曜日の番組総てを使って放送されたスタジオリイブ音源。二つ目は同じ1980年の4月2日、清志郎の29歳の誕生日に虎の門の久保講堂でのライヴを全曲収めたTapsody nakedというアルバム。三つ目は2008年2月、癌の治療から奇跡的に生還した記念の武道館ライヴ、完全復活祭。

それらを聴きながら、私の清志郎を書き留めてみたい。

1980年の1月、私は16歳で高校生、中学生の頃に目覚めた洋楽にトチ狂って、放課後は毎日中古レコード店巡り、夜は毎日NHK FMのサウンドストリートを聴いて次にどんなレコードを買つかばかりを考える毎日だった。その頃は洋楽礼賛小僧で、日本のロックなんか偽物じゃないかとかなんとか、クソ生意気な高校一年生だった。そして正月休み明けの火曜日、いつものようにエアチェックのカセットを回し、始まったサウンドストリート。その日は全編

それまで名前すら知らなかったRCサクセションという日本のバンドのスタジオリイヴだった。火曜日担当DJの森永博志の簡単な紹介の後、ジワジワとベースのイントロが始まり、それから40分、今まで聴いたことがなかった、洋楽も邦楽も超越した大爆発が続いたのだった。なんだこれ？！完全にノックアウトだった。

次の日、中学時代の音楽仲間と別の高校に進学した荒井謙ちゃんに電話して、「昨夜、聴いた？」「聴いた聴いた」「凄かったね」「凄かった、ライヴ、行こうぜ」調べてみるとRCサクセションは70年代初頭に人気があったフォークバンドで、その後人気が低迷、当時人気低迷期を脱すべく都内のライヴハウスでライヴを展開し徐々に話題になり始めたバンドだった。謙ちゃんと僕は、ひあやシティーロードなどの情報誌を調べまくって、ライヴハウスはもちろん、TBSラジオの公開収録やオーディオのショールームでの客寄せフリーライヴまで、行けるライヴに片っ端から通い詰める日々が始まった。そのきっかけとなったサウンドストリートのエアチェック音源が今も私のPod classicに入っている。

その後約3ヶ月、荒井謙ちゃんと私は、高校一年生のお小遣いが許す限りのRCサクセションのライヴに通い詰めた。多分3ヶ月で10回くらいは行ったと思う。そして彼らのライヴの集大成として4月2日の久保講堂でのライヴがあ

同じ人生の季節の中にいる。願わくば彼らが、その季節にしか出会えない、人生を左右する素晴らしい出会いに恵まれんことを。(斎藤藤)

筆者プロフィール
昭和38年、東京生まれ。高校大卒時代を通じ雑誌ロッキン・グ・オンに執筆。卒業後大手自動車会社勤務。零細運送会社社長を経て、現在大手商社シンカポール法人勤務。

忌野清志郎
JUMP (SONGS完全版 2008年1月21日)

歌：忌野清志郎 作詞：忌野清志郎
作曲：三宅伸治

夜から朝に変わるいつもの時間に
世界はふと考え込んで朝日が出遅れた
なぜ悲しいニユースばかり
TVは言い続ける
なぜ悲しい嘘ばかり
俺には聞こえる

Oh 荷物をまとめて旅に出よう
Oh もしかしたら君にも会えるわ
JUMP 夜が落ちてくるその前に
JUMP

今、私の二人の息子たちは私が清志郎と出会ったのと

り、それが数年ぶりのレパランティーンとして発表された。その時の完全版が私のPod classicに入っている。16歳の私の嬌声もそこに収められている。そのライヴを区切り、しばらく彼らのライヴは休止された。次に彼らのライヴを見たのは2ヶ月後(16歳の少年にとつて2ヶ月というのは結構長い時間なのです)、同じ久保講堂で行われた「唄の市1980」というアコースティックイヴェントだった。70年代前半のフォークブーム時代に行われていたイヴェントの復刻イヴェントであり、RCサクセションのアコースティック時代の楽曲へのレクイエムのようなイヴェントだった。その次に彼らのライヴを観たのは夏の日比谷野外音楽堂。

シーナ&ロケッツやヒカシューなど5つのバンドとの夏フェスだった。その時の異変は、リードギターの小川銀次が脱退し、生活上委員会、梅津和時のアルトに交代していたことだった。最初の3ヶ月とは何かが変わりつつあった。さらに次に観たライヴは、その年人気がうなぎ登りになり、12月にスタジオリコーディングアルバムが発売された直後、ついに武道館まで上り詰めたクリスマスイヴ・ライヴだった。このライヴで17歳の私の心に違和感が芽生えた。観客の殆どは彼らの勇姿を見ているだけで大騒ぎ、音楽など聴いてやしない。小川銀次が何故脱退したのかがわかるような気がした。周りが盛り上がりれば盛り上がるほど、17歳の私の心は冷めていった。

そして今に至るまで最後に見た彼らのライヴは、同年大晦日に晴海国際展示場で行われた年越しライヴ「オールナイトロックショー」。それを最後に私とRCサクセション、忌野清志郎とは距離ができてしまった。清志郎が色んな形で活躍しているのは耳にしつつも。

何が起きているのか誰にもわからない
いい事が起こるようにただ願うだけ
眠れない夜ならば夜通し踊ろう
ひとっだけ多すぎる朝
うしろをつらつらへ
Oh 忘れられないよ旅に出よう
Oh もしかしたら君にも会えるね

JUMP
JUMP
夜が落ちてくるその前に
JUMP もう一度高くJUMPするよ

世界のど真ん中で
ティン・パニーを鳴らして
その前を殺人者が
パレードしている
狂気の顔で空は歌って踊ってる
でも悲しい嘘ばかり俺には聞こえる

Oh くれたばつちまう前に旅に出よう
Oh
もしかしたら君にも会えるわ
JUMP 夜が落ちてくるその前に
JUMP もう一度高くJUMPするよ
JUMP 夜が落ちてくるその前に
JUMP もう一度高くJUMPするよ

骨董市で見つけた骨。どんな動物の骨かは店主も知らなかったが、人間のものではないと信じて購入した。「人間死ねば骨となる」の骨。死ねばこの骨の周りについていた肉はあっという間に腐って風化してしまう。そのくらい肉は儂い。しかし、僕たち生きているもの達の世界は骨ではなく肉の世界だ。喜びも怒りも悲しみも、言ってしまうえば肉の七変化である。それによって僕たちの人生は楽しくも悩み多きものとなる。そんな肉を支え続けた骨は実は全てを知っているのかもしれない。肉は幻、そして骨は真実。だから骨には無垢な美しさが宿る。



肉は幻、
骨は真実。

女優 伊澤恵美子と散歩する

昭和な散歩

その二 向島の床屋



向島は最近ではスカイツリーの地元として話題になるが、僕は落語に出てくる場所として興味があった。落語では花街として出てくるのでちょっと色っぽいイメージがある。車で都心から向かうと浅草を過ぎて少し走ったところから向島になるが、浅草と違って車で通りすぎるだけなら何の変哲もない街に見える。しかし数は少なくなつたが料亭もまだ残っていて、芸妓さんも100人ぐらいはいるようである。そしてちょっと脇道に入れば昔ながらの下町の風情が残っている。

伊澤さんを撮る撮影場所を探して大通りから脇道へ入ろうとした角に、青いペンキが剥がれかけたちょっとただならぬ床屋を見つけた。床屋にしては異色な外観だ。かなり朽ちた外観だったがまだ営業はしているようだった。しかし、散歩するには怖くてとても飛び込みで入る気がしない外観である。その朽ち方に惹かれて店の前で伊澤さんを撮影しようと思つて車を停めた。こういう下町は筋を通さないと怒鳴られるから事前に撮ることを了解してもらおうと恐る恐るドアを開けて中を覗いてみた。店主らしい親爺と近所のおばさんらしき女性が古いソファに座って欲談中。店の前で写真を撮りたいのですが、と言ったら親爺は快く承諾してくれた。「隣店内を見回して見たが、その何とも言えない混沌とした古さに魅力を感じて店の中でも撮らしてほしいとお願

いしたらこちらでも了承してくれた。親爺は二



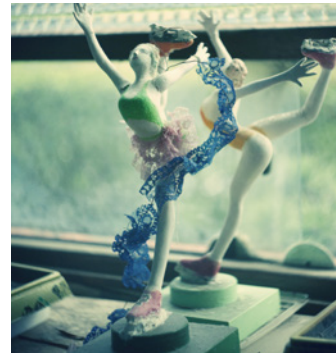
棚の中には錆びたままの鉾が並ぶ。



無骨な扇風機がこの床屋には似合う。



剥がれたタイルもここでは様になっている。



先代の店主が作ったという可憐なフィギュアスケーター。懐かしいピンク電話。思わずダイヤルを回すと「ジーコ」という音がした。置いてある雑誌も昭和のままで、まるで昭和博物館という雰囲気店内。

伊澤恵美子プロフィール
 9歳から舞台上がり、モデル・女優として活動。映画「子宮に沈める」主演、日タイ国際共同製作映画「アリエル王子」と監視人」主演他ドキュメンタリー映画「ちいさな、あかり」企画など多岐に渡り活動中。熊本市PR特命大使。
 FB: kawaeniko Insta: enikoizawa

代目で、先代から引き継いだとのことだが、先代が絵を描くのが好きだったらしく、絵を描いていた小さな机と椅子をそのままにしていた。使わなくなった錆びたはさみもそのまま。親爺は検査されたらやばいと言っていた。それ以外も店のほとんどが昔のまま。先代が作ったという粘土細工のフィギュアスケーターまでそのまま飾ってある。店主の親爺の話を聞いているとそのあまりのいい加減さに思わず笑ってしまうほどだった。親爺そのものが昔のままだった。余白のなくなった今の時代、その「ゆるさ」が気持ちいい。東京でこんなに素敵でいい加減な床屋が存在しつづけていることがうれしかった。でも親爺には悪いが自分の頭はやつてもらいたいとは思わない。「この辺りは昔花街だったから床屋が多いんだよ。でももう少ししたらみんななくなっちゃうだろうな」と親爺はほつりと言った。

追記…この原稿を書いた後、次号の撮影で向島に行った時にこの床屋はなくなっていた。近くのカフェのマスターに聞いたら5月で閉めて引越したそうだ。東京から粋な床屋がひとつ消えてしまった。(鳥)

中目黒 楽屋20周年を迎えて 苦し樂し裏の世界。

ももとの発端は、たまたま手にした求人誌「フロムエー」だった。それまで、音楽への情熱は人一倍あるつもりだったが、その世界に飛び込むきっかけが見つけられずに、じりじりとした毎日を送っていた。だが、その求人枠を見た瞬間に、背筋がぞくぞく、呼吸さえ苦しくなるのを覚えた。これだ！はやる気持ちを抑え、電話した先が、ブルーノート東京のオーディングスタッフ募集だった。1988年秋、27歳を目の前にしていた頃。こうして、わたしの音楽人生がスタートした。

とは言え、いきなり世界トップのミュージシャン相手に、素人同然の自分が音を作ることなど当然できるはずもなく、師匠である藤田誠司氏の教えを請いながら、その後の苦難の道をスタートしたに過ぎない。好きこそもの上手なれとは言うけれど、どんなに好きでも、できないことはできないと痛感する毎日。

ある日、ベースの巨匠、レイ・ブラウンから、ちよつとこいとステーションと呼ばれ、ベースからはんの100目のところに耳を置き、ベースラインを数分。「覚えたか？」「は、はい！」「このままの音をスピーカーから出せ！」と言われ、必死に音を作る。

これがかきつけて目が覚めた。生の音を自分の中にしっかり叩き込んでおけば、どんな状況



楽屋レーベルのCDの制作で録音中のまっしー。

況であれ、音の目標にまっすぐ向かえることがわかった。音作りは、技術より気持ちが大変である。たくさんのミュージシャンから、同様のことを教えてもらった。

しかし、ひとつ大きな壁があった。それが言葉である。どんなに技術があっても、言っていることがわからなかったらまったく意味がない。当時は、いちいちスタッフの人に通訳してもらいながら、どうのこうのと音を作っていたが、あーめんんどくさい！という訳で、独学で英語の勉強を始めた。いまだにそんなにわかっているわけじゃないけど、サウンドチェック、リハーサルなどは、通訳なしで乗り切れるところまで頑張った。だけど、本当のところは、目の前に、それもレコードでしか聞いたことのないようなジャズの巨人たちに、どんな気持ちでプレイしているのか、自分の音楽について、旅の話など、じかに聞いてみたいというほうが強かった。

英語の勉強もかねて、一人でNYに何度も行った。セントラルパークで、全財産を枕に寝たこと、ワインクラッシュャーに会ってデパートに駆け込んだり、おいおい！ということも多々あったが、それ以上に、生の音楽で満ちあふれているNYという街にノックアウトされた。

日本も、もつと気軽にライブが聴ける店があったらとの思いが強くなる中で、1996年

筆者紹介

あるアーティストの楽屋でのライブのフライヤーを作ったことがきっかけで増茂さん(以下まっしー)と知り合いました。何度か会っているうちに、楽屋で一年に一回開催されるアンバーサリーライブのフライヤーをお願いされるようになり、今年の20周年のライブで5回目になります。今号の表紙の藤島さんも楽屋のライブの常連アーティストのひとり。

まっしーはアーティストの音をデザインするわけですが、アーティストは我が儘な人が多い。我が儘だからアーティストとも言えるわけですが、そういう人たちの音をデザインするので、大変だと思えます。その大変さはアーティストのグラフィックデザインをやっている僕も少しわかるような気がします。

そんな裏方を担当するまっしーですが、やはり裏方ゆえに人との関係の作り方がうまい。自分を出す前に、まずアーティストのことを知る。それが全ての人間関係にも表れているのだと思います。いわゆる押し出しは強くないのに、いつの間にか彼の周りにはおもしろい人たちが集まってくる。裏方ゆえの信頼感と彼独自の才能だと思います。

そんな彼が神保町に楽屋2号店を出すことになり、僕もデザインでお手伝いすることになりました。今回はただお店を出すだけでなく、アーティストを支援するシステムまで作るユニークな仕事になるようです。そんな開店準備に忙しい中、楽屋の20年間を振り返りつつ、彼の音楽に対する思いを語ってもらいました。(鳥)

とを考えるのは大好きだった。ま、酒を飲んだの失敗も多々あるが…。

現在、大学時代の先輩であり盟友でもある世古真一氏と共同で、楽屋(らくや)のウェブサイトを&フランチャイズシステム「The座」を立ち上げ、アーティストがどうやって自立し、音楽で食べていける環境をつくれるかをテーマに、日々奮闘中！日本全国楽屋(らくや)化計画を目標に、この秋神保町に2号店をオープンする予定。

これからも、たくさんのアーティストやお客様や仲間などと酒を酌み交わしながら、そして親爺の愚痴を聞いてもらいながら、音楽を愛する者として、末永くお付き合い合います。

(楽屋オーナー 増茂光夫、まっしー)

7月、縁あって7年ほどお世話になったブルーノートを離れ、中目黒で楽屋(らくや)というライブハウスをスタートする。オーディングは、ライブペインティングのトム・レイズと、ビクター・ジョンズ(Ds)、アレックス・フォスター(Seb)、という豪華キャスト。それから、長い付き合いのコーラグループ BREZNE。その後、現在の場所に移り、今年で21年目を迎える。

20年間、やれることは何でもやった。大企業と違い、個人事業の飲食店なので、思いつきやひらめきとでも言うか、小さなフェスをやりたり、習字大会をやったり、客を巻き込んでやるゲームも楽しかった。どちらかというと裏方の暗い人生を歩んできたイメージだが、楽しいこ

芸妓の後ろ姿に見る『女の品格』

あの夜のことか今も私は忘れられない。

北野天満宮を左手に道なりをまっすぐ5分ほど歩いていくと、やきもちで有名な天神堂が見えてくる。その角を右折した先に広がる京都最古の花街・上七軒で、生まれて初めてお座敷遊びをした。

石畳風に舗装された通りには電柱や電線はひとつもなく、街を照らすのは常夜灯と店先に吊るされた紅い提灯の光だけ。時が止まったような。時がさかのぼったような。不思議な時間の感覚と肌を優しく撫でる空気に体が包み込まれていく。ノーベル賞作家・川端康成の小説「古都」にも登場するこの優美な街に、うつとりした。一滴のお酒も口にしていないのに、すでにほろ酔い気分になった。色気のある街は、確かに存在するのだ。

殿方4人と私の二行が向かったのは、「梅乃」というお茶屋だった。奥の座敷に入ると、すぐに女将さんが出てこられた。生まれも育ちも上七軒。中学生の頃にはすでに芸妓としてお座敷に上がっていたという筋金入りの花街女性である。ピンと伸びた背筋に、二本筋の通った生き方が表れていらつしやる。ほんの少し言葉をお交わしただけだったが、正座さえもままならぬ自分がとたんに恥ずかしくなり、自然にすくむ肩

に取材・研究を続けてきた。無知ゆえにたくさん恥もかいてきたけれど、それだからこそ知れたこともたくさんある。

例えば、お座敷遊び。映画「舞妓Hagaaan三」に出てきた野球拳は今日、実際にはほとんどとされていない。期待心があったのでちよつとがっかりしたが、とらとら、とらとらとの掛け声で知られる「とらとら」や白熱することアカペラで歌う曲のテンポがぐんぐん速まる「金毘羅船々」などは、実に面白い。

「お兄さんの負けですね」「それでは祝杯を」——勝つても負けても、一枚上手な芸舞妓さんには色んな意味で飲まされてしまうのだ。飲み干したあとは、「いーよう。お兄さんはお強い、男前やー」。こうして、飲む手にはさらに拍車がかかる。

着物ひとつをとつても、芸妓さんや舞妓さんは、長襦袢との合わせ目が逆になる。左襟を取る。男の人の手が入りづらい着付け方は、芸は売っても、体は売らないことの証。柄、半衿の色など、全てのディテールに意味があり、花街に生きるプロフェッショナルとしての段階にいるかは、それらを見れば一目瞭然なのである。

カメラマンの友人に、花街で撮りためた写真を見せてる機会があった。「岸さん、コレ、完全に親爺目線じゃないですか」と彼は言い、芸妓さんや舞妓さんの後ろ姿をヨリで撮った写真を指差した。「舐めるような撮り方ですよ。女の人には珍しい……というか、やっ

上七軒芸妓・梅葉さん(写真:佐藤清悟)



を叱るように、精いっぱい胸を張った。

ゆつくりと開いた襖から、女性が二人入って来た。舞妓さんと芸妓さんである。お引きずりと呼ばれる裾の長い着物は、絹の京友禅。舞妓さんの髻を飾るのは、あやめの花かんざし。匂い立つような花の色とお引きずりの黄蘗色のコントラストに目を奪われたが、この夜、私が終始釘付けだったのは、芸妓の梅葉さんの方だった。

たぶん男の手のひら、ひとつ分くらい。背中が半分露わになるほど深く抜かれた衿足にはお顔と同じ白塗りの化粧が施されていて、アルファベットのWに丸みをもたせたようなシルエットの、うなじの部分だけ地肌が見える。二本足は、謎めいて見えた。エロティックなのに、溢れんばかりの気品が漂っている。何のための塗り残しなのだろうか。梅葉さんの美しい横顔と一挙一動を眺めながら、ほんやり考えているうちに、同行した男性たちの頬はすっかり赤くなっていた。

三味線を鳴らし、「祇園小唄」を唄ってくださいたのは女将さん。窓越しに見えるのは、丹念に手入れされた木々たちが彩る中庭。雅な音色の生演奏は心地良く、それに合わせて舞う梅葉さんの姿は、浮世離れという言葉がぴったりだった。妖艶、へびん、才色兼備。その日から、私は京都の花柳界に夢中になった。

あれから4年が経つ。花街に生きる女性やその由緒ある文化について、知りたいこと、聞きたいことがありすぎた私は、今日に至って足繁く京都に通い、独りばり親爺ですね」

自信を持っているのか、悩むべきなのか。これについてはさておき、なぜ花街女性の後ろ姿に惹かれるのか、その理由について考えた。答えは明確だった。1ミリの気も抜いていないからである。

自分の後ろ姿は、鏡や写真に映さないかぎり見ることはできないが、だからこそ、表側を取り繕えば繕うほど、そのポロが出る。叮ゆく女性を見れば分かるだろう。すれ違いざまに「綺麗な人だな」と思い、振り返つて見ると、ビチビチすぎるパンツやスカートから下着のラインが露わになっていたり、ポロポロにすり減ったハイヒールを履いていたり。せつかくの美人が台無し。思わず萎える場面に遭遇したのは、きっと二度や二度ではないはず。

女の品格は後ろ姿に現れる——これは花街の女性と接していて深く学んだことであり、いち女性として、普段から気遣うようになったことでもある。つい先日、本誌編集長から「岸さんは根が親爺」とお墨付きをいただいたばかりだから、私の後ろ姿には、親爺がひよつこり姿を現しているかもしれないけれど。

(岸 由利子)



衿替え(芸妓デビュ)やお店出し(舞妓デビュ)の日は三本足を描く(写真:佐藤清悟)

筆者プロフィール

著述家/画家 英国ロンドン・セントラルセントマーチン美術大学DfM科(学士号)卒業。在学中、スーツの聖地・サヴィル・ロウ二番地「ギープス&ホークス」で日本人女性として、約2年半に渡る異例のテーラリング修行を伝授。帰国後、「ブランド」マルコマルカを創立し、東京コレクションにて最年少女性デザイナーとしてデビュ。ファッション界で活躍したのち、現職に転身、オーダースーツや腕時計などのファッション・芸術・文化の分野で執筆する。

バード電子のバードはチャーリーパーカーのニックネームだった

その2 「23歳の決断」

普通に起業する人は、好きだったり、夢があったり見通しがあったりするものですが、僕が起業したのは、それは少し違いました。でも、成り行きで始めたわけではなく、23歳なりの大決断だったのです。仕入れ先もお客様もゼロの文字通りのゼロからのスタートでした。

電気工学を学びながら毎日ジャズを聴いて暮らして、電子部品メーカーに入社後も就業後に30分以上かけ、自由が丘のジャズ喫茶に通っていた。なんだか自分の人生が二重に進み、実生活は仮なのかと思った事すらありました。

社会人になってからはジャズ仲間は一人もいなかった。ジャズを楽しむ喜びを分かち合う事ができず、一人でジャズに取り組んできました。取り組んでおかしいかもしれませんが、僕にとってジャズを聴く事は趣味ではなく、取り組みだったのです。たかが音楽に、『趣味とか娯楽とかじゃない何か』って気持ちはわかりますか？僕は、「とてつもなくジャズが好きで、特に60年代のフリージャズが好きで、さらに高柳昌行が好きなのだ」なんて事は、世界中だれも理解してもらえないと思っていたから、会社の同僚や上司に

は詳しくは話をした事はありませんでした。ましてやその『趣味とか娯楽じゃないジャズへの取り組み』の意味の説明を思っていた通りに『生命』につなげて説明すれば、目を白黒させてから「暗い」と言われるに決まっています。(会社では斉藤は暗いと言われていたのだ)

そんなわけで、何も相談もせずに辞表を出した時は驚かれました。勤めたのは3年3ヶ月。社長に「何が不満だ？」と尋ねられ、「不満はありません。あたらしい事をやりたいと思っています。いつか起業したいと思っています。」と答えた。

「父さん、僕は会社を辞めて故郷に帰りジャズ喫茶を開店したので協力して欲しい」と実家に電話をしたところ、父は本気にしていないように、「とりあえず、地元でしばらく働けばいい。職は、見つけておくから」と言わてしまいました。僕は23歳で貯金は100万円。これじゃお店のオーディオも買えない。そこでひらめきました。「起業してお金を貯めてから始めればいいんだ」と。僕は電子部品のメーカーを始める事にしました。その時に交際していた女性が妻です。二人で会社を登記し、二ヶ月後に世界最小の電子部品

メーカーが誕生しました。そこまでは簡単でした。その後言葉にできない程、大変な苦労がありました。受注が少なくて倒産の不安が3年間つづきました。

僕の会社は株式会社バード電子。

バード電子のバードは、サキソフォン奏者のチャーリー・パーカー(チャーリー・ヤードバード・パーカー)のニックネームのBIRDから命名した。実は、チャーリー・パーカーはそれほど好きではなく、レコードもあまり持っていなかった。ジャズジャイアンツで好きなのは、マイルス・デイビス、オーネット・コールマン、チャーリー・ミンガスあたりで、チャーリー・パーカーよりは少し後の世代だったのです。バードにしたのは「わかりやすさ」でした。株式会社マイルス、株式会社オーネット、株式会社ミンガス等、どれも意味を聞かれた時の「説明がめんどうだ」と考えてモダンジャズ界ではまあまあ有名な、チャーリーパーカーのニックネームのバードにした。「これなら鳥と認識されるから、めんどうな説明も省ける!」(おかげで事業を始めてから長い間、社名由来について質問をされなかった)そして、もっとわかりやすく、バードの後に電子を付けた。

「もしもし、バードの斉藤と申しますが」よりも「もしもし、バード電子の斉藤と申しますが」の方が説明が一手間省ける。あと、エレクトロニクスではなく漢字にしたのは、一人でやっているのに、バードエレクトロニクスでは、名前負けすると思っていたからです。

僕は、ジャズ喫茶開店を目指して本気で必死で働きました。でも、予定通りには行きません。予定どころか、まったく売れない時代が続きました。そして3年が経ち軌道に乗り始めた時にはジャズ喫茶開業の夢のことはすっかり忘れていたのです。「あなたは昔マイルス・デイビスが好きだったじゃない」と妻から言われた時、その感情が思い出せないくらいもう何年も音楽を(真剣に)聴いていなかった。

追記

父親は何ひとつ反対しなかった。僕が東京の学校を選んだ時も、「何故札幌ではいけないのか」なんて聞かなかった。結婚する時も起業する時も反対されなかった。父が唯一僕の行動を止めたのは、ジャズ喫茶を開業したい、と電話で話した時だ。それまで僕の行動に反対したことがなかった父が、「ジャズ喫茶をすぐに始めるのは無理だ」と言下に断じたのだ。あの時に反対されなかったら、今の僕はとっとなっていたのだらうと思う。つづく

(斉藤安則)



BIRD電子の看板(撮影:筆者)

筆者プロフィール

昭和35年、北海道生まれ。株式会社バード電子代表取締役。23歳で電子部品設計製造の会社を設立。18歳の時にロックファンをやめジャズファンになる。高柳昌行の晩年に永くファンであった事を告白し7年間ライブに同行し記録用にビデオ撮影を行う。現在は高柳専門のレーベルMINADISCを運営。不定期に未発表音源のCD化を続ける。

先日夜中に久し振りに脹ら脛が彎った。痛みに目が覚めて攀りそうだと思ひ必至で足首を動かしてみた。が時既に遅し。痛みは頂点に向かつて登り始め、唸りながら痛みが頂点を越えるのを待つ以外なす術がなかった。女性の脹ら脛が好きで脚フェチへの神からの罰だと思つて痛みに耐えた。別名「こむら返り」とも呼ばれる中年以降に多い現象である。

キミに隠れて

脹ら脛の

微笑みが

僕を

誘惑する



のふくらんだ部分を「脹ら脛(はぎ)」と呼ぶようになった。

この脹ら脛は脚フェチとしたら脚の中でも重要な部分である。なぜなら脹ら脛は非常に表情が豊かだからだ。脹ら脛の奥にある筋肉によつてその外側の脂肪が織りなす複雑な表情は「ゴテイク」である。特にハイヒールを履いて歩く時に見せる緩急のある表情に生々しい女の肉体を感じる。それゆえに街を行くハイヒールを履いた女性の後ろ姿に「シャッターを押ししてしまう」。女性の脹ら脛は脚フェチにとつたら第二の顔でもあつた。その形、表情、そして歩き方に女性の人格が滲み出ているように思うのである。さらに脹ら脛は無防備な後ろ側だから余計にその女性の素が出てしまうように思えるのだ。

さて写真のモデルの女性の脹ら脛だが、僕の好みからするとやや細くて長いのだが、柔らかな曲線を描いて足首に落ちる緩やかなラインがとても美しい。歩くとき筋肉によつてあぶり出される表情も美しい。この女性はふくら脛同様、性格はおだやかでおっとりしていた。が芯は強い。と思う。

こうやつて脚フェチは脹ら脛を見て妄想するのである。最近ではスマホを見ながら歩いている女性が多いけれど、その後ろ姿はあまりにも無防備。特に夏場は気をつかつた方がよい。なぜならそこにはあなたの第二の顔である脹ら脛があるのだから。(鳥)

連載コラム 競馬の風景 その二

大ちゃんの人生

私の中学の友人で、小さな弁当屋をやつてゐる働き者がいる。1年365日、正月を除き毎日朝は3時半頃からご飯を炊き、当日に出す総菜を作つてゐる。私は時々、朝風呂の帰りに週末の競馬ほどの馬でいくか、スポーツ新聞を持つて遊びに行く。その友人の仁しやんは「ヨォー」と云いながら喜んで甘い砂糖入りのコーヒーを出してくれる。仁しやんは本命派で、私は穴派だ。

いつものように競馬談義をしてゐると、段ボールにいっぱい野菜を抱えた大男の八百屋の大ちゃんがやつてくる。本名が大山で、あさ黒の肌で100キロは有に超えているせいもあつてみんな「大ちゃん」と呼んでゐる。前歯がない。酔つて自転車からこけて前歯を欠いてそのまま。性格はいつて大人しく、大ちゃんから話かけてくることはほとんどない。

大ちゃんは午前中だけパートで市場の八百屋の配達をやつてゐる。年齢は50才に届くかどうかといったところだ。もちろん彼女もいない、独身だ。10年前から野菜を配達していたけど、最初の頃ははにかんで、会釈するくらいだった。こちらも

を見つけた。なにしろ190センチ近くもある体だ。雑踏の中でも目立つてしまふ。

「大ちゃん、競馬するの?」と尋ねると「…ええ。」と言葉少なに答える。大ちゃんは前レースから来ていたみたいだった。「…何買ったですか?」初めて大ちゃんの方から話しかけて来た。頭は本命筋から3頭選んで、2着は5、6頭流して3着に9番人気のマツリダゴツホの固定の三連単。と答えると「走りますよ、マツリダゴツホ。中山競馬場得意ですから。」と静かに微笑んだ。ピギナーの受け答えじゃない。過去中山競馬場でマツリダゴツホが好成績をおさめているのを知っている人の発言だ。

「大ちゃん!競馬は長いの?」と尋ねると「30年位ですかね」と答えた。やり始めが10代後半半位になる計算だ。大ちゃんは、頭は何買ったの?と尋ねると「マツリダゴツホです」と言った。「頭は厳しいんじゃないの?」と聞くと、「わかりませんよ」と又微笑んだ。メインの11レース、マツリダゴツホが見事1着!私は頭をはずし惨敗。大ちゃんも2着目の馬をはずして負けではあつたが、人気がないマツリダゴツホの実力を見抜いていた眼はさすがと云うしかない。稽古で騎手の代わりに馬に乗る助手の体重まで以前は知っていたという異常なまでの情報収集力に驚いた。そんな大ちゃんにちよつと興味を持った。数日後、弁当屋で大ちゃんが来るのを待つて話を聞くことにした。八百屋の



配達車に戻る大ちゃんの後ろ姿(撮影:筆者)

ジャンパーに、いつ洗つたか解らないべつとりとした髪の大ちゃんがやつてきた。野菜の納品を済ませた後いろいろ聞いてみると大ちゃんは県内でもトップクラスの高校に通つていて、大学試験に失敗し地元の大学に進んだが面白くなく、キャンパスに出会い、レースを追いかけてホテル暮らしをし、大学に行くのも辞めてしまったそうだ。その後、就職する事もなく、時間が出たら釣りに出かける日々を送つてゐるらしい。しかし今でも競馬の記事が載つてゐるスポーツ新聞を渡すと、恐ろしいほどの眼光で記事を眺めている。(藤田和男)

筆者プロフィール
昭和34年熊本市生まれ。福岡、東京でカメラマン修行の後熊本市でフリーカメラマンとして独立。競馬歴は約20年。JRAに奉納した額はおそらく税金を上回る。